

「さいわいな人」

詩篇 第1篇 1節～6節
ヨハネによる福音書 第15章 5節

説教 本庄侑子伝道師

詩篇第1篇は、詩篇全体の要約であり結論です。イスラエルには長い歴史がありました。繁栄を誇った時、惨めさの極みを味わいつくした時、人々は神に向かって叫んできました。それらを一冊に束ねる時、何百年もの歴史に耐えぬいて明らかになった事実を、その冒頭に興奮気味に記すのです。『そうだ、このような人がさいわいなのだ』と。

そうして語られるさいわいな人は、夢が実現した人や悩みから解放された人ではありません。いつも聖書を持ち歩き、読み続けている人です。神が共にいて語りかけてくださっている。その事実を知って喜び、その中で生きる人です。

私は四方八方、山に囲まれた奈良市で育ちました。山を見ていない時も、忘れていた時も、山に囲まれていると知らなかった赤ちゃんの時から、いつも山に囲まれていました。さいわいな人が置かれているのはそのような場所です。自分がどうであろうとも、神に囲まれるようにして生きている。この事実は変わりません。

聖書が語るのはただ一つの事実です。インマヌエル。神があなたと共におられるということです。そのために神は人となり、十字架について死に、よみがえってくださいました。私たちはそれを知らない、あるいは忘れてしまうゆえに、的外れな生き方をしてしまいます。この世界を創り、私たちに命を与え、目的をもって生かしておられる神がおられるのに、自分で生きる目的を作り出し、自分で計画を立て、それを達成するために生きてきました。そうして本当の自分を失い、他者との関係も失い、生きる意味も失ってしまいました。

今、私たちもまた、さいわいな人が置かれていた場所にいるのです。私たちは「流れのほとりに植えられた木」(3節)です。自分で流れを掘り出す必要はありません。既に神が、流れのほとりに植えてくださっているからです。その人は、「時が来ると実を結び」(3節)ます。自分で時を作り出そうとあくせくしません。神の「時」に委ねて生きる安らかな信頼があります。

キルケゴールがこのようなことを語っています。『キリスト者とそうでない人たちとの基本的な違いは、キリスト者たちは自分が愛されていることを知っているということではない、と

私は思っています。キリスト者たちは、毎日その事実を思いめぐらしながら過ごします。その思いで時を満たし、自分たちのふるまいを定めていきます。そのことが、痛みの時には忍耐を、喜びの時にはその意味を与えてくれます。』

私たちが囲む神の事実を受け取って、我がものとする。それが洗礼を受けるということです。神なしで生きてきた古い自分に死に、神と共にある新しい命をいただくのです。兄弟姉妹と共にこの事実の中を生きていくと、詩篇が語るさいわいが、もっと鮮やかに見えてくるようになります。同時に、神を知らずに動いている世界や私たちの姿をも新しく見出していきます。

困難がやってきたとき、そこから解放されるため、あるいは自分の願いを実現させるために「はかりごと」(1節)を企て、自分自身で何とかしようとします。神の「時」が待てずに、神から離れて歩き出し、そこに立ち、ついには座るようになります。

このような歩みを経て、私たちは一時的に幸せな気分にはなれるでしょう。しかし、聖書はそれを「さいわい」とは呼ばないのです。むしろ、数百年分の歴史や過ちを背負った姿で待ったをかけてきます。彼らは知っているのです。神なしで得たさいわいな気分は、ほんの一時的でしかないこと、風が吹けば飛ばされてしまう「もみ殻」(4節)のようなものでしかないことを痛いほど味わってきたのです。

詩篇が一冊にまとめられたのは、礼拝で読まれるためでした。私たちも、礼拝ごとに詩篇に声を合わせることを通して、神なしで歩く自分自身と直面させられながら、一つの事実、詩篇1篇へと導き返されます。神が私のことを昼も夜も思っていてくださる。そう知って、昼も夜も主のおきてを思わずにはいられなくなった姿で、新しい週へと送り出されます。

詩篇が語るさいわいな人。それは、他の誰でもない私たち自身のことです。神の前にある私たちの本当の姿、私たちの人生そのものです。神は、私たちをさいわいな人としてこの世に植え、永遠の実りをもたらすため、今週も共にいてくださるのです。

(記 本庄侑子)